

ほとんど自明的なものとして受け取られている認識観はオッカムに遡るものである」(p. 225) のも同じ理由による。それは「オッカムにおいては認識の働きは(精神のうちなる質)として精神のうちなる対象(命題)に行きつき、精神のうちにおいて完結するものとして理解されている。認識の働きと、精神の外なる事物との(作動因果性による)結びつきは認められているが、オッカムの認識理論の根本前提は精神と事物との分離であり、その意味での認識主観と対象との二極対立であるといえる」(p.224)からである。

この認識観は、それが「現実にかかが認識されるときに認識する者と認識される者との合一 unio が成立する、というアリストテレス的洞察」(p. 209) を伴わない点で「新しい」のである。しかしたとえば『知性の単一性』(c. 3)においてトマスが「知性的靈魂は身体の形相である」というスコラ学の基本命題を、オッカムがそれを排除するために用いた「単に身体を動かすものであって形相でなくても、われわれが知性的靈魂によって知性認識すると言える」(『自由討論集』I, q. 10. OT, IX, p. 63) という論拠をも否定する仕方では主張したのは、「古い」認識観によっているにしても、さしあたりそれは「この世の生」において超越的な神的理性との間にこの「アリストテレス的洞察」にもとづく「合一」を措定する説を排除するという「新しさ」を持つのではないか。全編にわたって知的な緊張をもって読むことを余儀なくさせる本書の著者の視野の広さに圧倒されつつ、何故、「中世後期認識理論の研究」という副題のついた本書においてこの点が論じられていないのかとあらためて問わざるをえない。

ジョン・マレンボン著／加藤雅人訳
『後期中世の哲学 1150-1350』

勁草書房、1990年、xvii+242+xxxiv 頁

田子多津子

本書は、John Marenbon (以下 M. と略記) の *Later Medieval Philosophy (1150-1350) An Introduction* (Routledge & Kegan Paul, 1987) の翻訳である。M. はすでにこれに先立って、*From the Circle of Alcuin to the School of Auxerre*

(1981), *Early Medieval Philosophy (480-1150) An Introduction* (1983—両著作とも本誌上において筆者が書評を試みた〔第24, 28号参照〕)を著しており、本書は後者の続編であり、本書をもってM.の中世思想に関する展望はいちおうの完結をみたと言える。

本書は、中世後期の知的活動の場である大学の制度、教育課程、テキスト、授業の方法等が具体的に解説される第一部と、そこにおいて「知性認識の問題」がどのように取り上げられ展開されたかが分析される第二部とからなり、問題史的構成がとられている。本書を通読したときに気づくのは、随所で「中世思想」(medieval thought)と「中世哲学」(medieval philosophy)という表現が混在している点である。これは何を意味するのであろうか。このことは、すでに多くの中世哲学に関する概説書が刊行されているにもかかわらず、本書を著したM.の意図とも関連すると思われる。M.は、この日本語版のために特に寄せた序文の中で、本書の意図は中世後期の哲学の概説書としての機能を果たしながら、同時に新たな研究方法を提示することであると述べ、それを「歴史的分析」(historical analysis—以下訳者の訳語を用いる)と呼んでいる。そこには、中世思想を哲学としてとらえる場合にいかなる方法がとられるべきかということに対する意欲的な姿勢がうかがえる。

M.も述べているように、中世思想を哲学としてとらえるべきか否かということについては議論されて久しい。本書において、M.は従来の中世思想の研究方法を三つにまとめている。第一は、van Steenberghen に代表されるような、哲学を神学から分離してとらえようとする「分離主義」の立場であり、第二は、Gilson が提唱したように、中世における哲学と神学との分離を認めながら、中世哲学を「キリスト教哲学」としてとらえ、それはキリスト教の啓示に基づいており、ある種の基本的信仰簡条から切り離して理解することはできないとする立場である。さらに第三は、*The Cambridge History of Later Medieval Philosophy* (ed. by N. Kretzmann, A. Kenny and J. Pinborg) の編集方針に顕著に示されているような「分析学派」の見地であって、当時の知的状況や思索の前提を顧慮せず、あくまでも中世思想の問題を現代の関心から扱おうとする立場である。これらの立場の相違は、中世思想の流れの中で神学とのかかわりにおいて哲学をどう位置づけるかに関する見解の相違を反映するものと言えよう。M.はこれら観点のうち、第二、第三、ことに中世哲学と現代の哲学的関心とを結び付けようとする「分析学派」との方法上の共通性を認めている。しかしM.

は、従来の中世哲学研究には歴史的考察が欠如していると述べ、中世と現代のわれわれとの間にある溝をまず意識したうえで、中世哲学の問題点を現代の問題と関連させ、現代の読者の関心と後期中世の思想家の著作とに介在する溝を埋める方法として「歴史的分析」という独自の方法を提唱するのである。M.はすでに前二著作において当時の glossae や写本の伝存状況に注目し、その時代の具体的な知的状況を把握しようとしてきたが、ここでの「歴史的分析」とはそれを概念化したものと言える。すなわちそれは、資料を駆使した歴史的考察によって、中世哲学の諸問題を、それが実際に論じられていた大学等の制度を含めた知的状況の中に置き直し、そのうえで、現代の哲学的関心と共通するものを見いだし考察しようとする方法である。こうした「歴史的分析」の根底には、英語圏において中世哲学の叙述が歴史家の領域と見なされるきらいがあったことに対する反省があるように思われる。M.によれば、中世の思想を研究するには歴史家と思想家の両方の素養が必要なのである。本訳書では、〈historian〉という一語が文脈により「歴史家」と「哲学史家」とに訳し分けられているが、そこには M. の意図を汲んだ訳者の苦心がうかがえる。

M.は前二著作において、論理学と神学との fusion という観点から中世初期の思想を論じていたが、中世の思想状況を、論理学を軸としそれと神学との関係を通してみようとする姿勢は本書にも共通する。しかし、対象となる時代により論理学の意義は変容するのであって、本書の第一部における考察の中で明らかにされてくるのは、論理学が道具として確立されるのみならず、「哲学」の一分野として重要な位置を占めるようになったということである。さらに、大学の制度の確立と共に神学と自由学芸 (M.はこの総体を「哲学」ととらえる)、神学者と学芸教師 (arts masters) の階層的位置づけが定着したことが確認される。M.によれば、そのことがかえって学芸教師の立場を保証することになった。形而上学や自然科学に関するアリストテレスやアラビア人の著作は、クールソンのロベールの禁令等にもかかわらず受容され、13世紀半ばからそれらの著作をテキストとして用いていた学芸教師は、大学教育という共通の場で、神学者の敵対者ではなく、従属的ではあるが神学者の協力者であった、と M.は指摘する。したがって、この点から従来の哲学史にみられた「神学者対学芸教師」という図式は批判されるのである。

M.のこうした観点を具体的に示すのが、第二部で主題として選ばれる「知性認識」であり、ことにその導入部には「歴史的分析」の特色がよく現れている。知性認識の

問題は、学芸教師によって、論理学や文法を教える際、外界の対象、対象についての精神内の概念、それらを語る際に用いられる言葉の関係の探究の中で取り上げられた。M.は、第二部に含まれる「様態と志向概念」という表題を持つ第8章において、従来の中世哲学史ではまったくふれられないか、あるいは名前が言及されるにとどまるダキアのポエティウス、マルティアヌス、ラドゥルプス・ブリトといった学芸教師の見解を取り上げ、神学者アキナスの考え方と比較している。M.によれば、その場合、学芸教師は専門用語を発見し、洗練することに長けており、その限りでは概念の整理に貢献したが、これにとどまり、啓示とのかかわりにおいて知性認識の問題を扱う別の方法を提示するには至っていない。彼らは神学に対する哲学の従属的位置づけを踏み越えようとはしなかったのである。

それに対し、知性認識に関する独創的見解を提示したのはすべて神学者であったこと、したがって彼らの議論は常に暗黙のうちに神学的前提を含んでいたことを M. は指摘し、オヴェルニュのギヨム、アキナス、ガンのヘンリクス、ドゥンス・スコトゥス、オッカムのウィリアム等の見解を取り上げる。知性認識の問題の源泉はアリストテレスの『デ・アニマ』における議論やそれに対するアラビアの注釈書にあるが、彼らがそれを論じたのは主として三位一体論や人間以外の知性的存在者の認識の仕方についての議論といった神学的な文脈の中においてであり、人間の知性認識そのものへの関心からではなかったことに、M. は注意を促すのである。M. によれば、われわれが中世思想に取り組む際、こうしたことを中世思想と現代のわれわれを隔てる溝としてまず意識し、理解しなければならない。今日再評価されているオッカムのウィリアムについても、M.は、知性認識に関するアリストテレス的見解を否定したという点にその革新性を認め、そこに現代のわれわれが親近性を抱く所以があるとしながらも、そうしたオッカムですら職業的神学者であったことを強調する。中世哲学に取り組むにあたり、われわれはとかく分析学派の見解に共感を抱きがちであるが、分析学派の持つ欠陥を指摘したという意味で、本書の意義は大きい。

ただし M. の言う「歴史的分析」は、中世という時代の特殊性の強調と現代との親近性の探究との微妙なバランスの上に立脚している。M.は、第一部の結びにおいて、この方法は中世哲学の通史の叙述には不適であると述べているが、本書は中世哲学に関する概説書あるいは通史の成立根拠に一石を投じたものと言える。

M.の原著は必ずしも読みやすいとは言えないが、それをこうしたアクセシブルな

形で訳された訳者の労を多としたい。ただ、参照頁数の脱落と誤記が何箇所も見受けられるのが残念である。以下気づいた箇所を記しておく。p. 17, 1. 8 13頁→14頁；1. 11 参照頁数欠落→62-3頁；p. 18, 1. 3 62-3頁→10-13頁；p. 27, 1. 5 参照頁数欠落→19頁；p. 63, 1. 9 16-8頁→17-8頁；p. 162, 1. 5 参照頁数欠落→24頁 ギリシア語誤植 p. 116, 1. 1εξις→εξις p. 123, 1. 13 *πουητικός*→*ποιητικός*；1. 14 *νοὺς ὄλικός*→*νοὺς ὄλικός*；p. 125, 1. 5 *έντελεχεία*→*έντελέχεια* その他 p. 143, 1. 5 考えられてた→考えられていた；p. 178, 1. 10 知論→知性認識論